

鄧石如 隸書冊頁『詩經』大雅抑篇について

遠藤 昌弘

A study of Chinese poem anthology "Shi-jing", By Deng Shi-ru

Masahiro ENDO

0. はじめに

さる平成五年一〇月二六日また平成一一年九月二八日、東京国立博物館（東京 上野）において、鄧石如の隸書冊頁『詩經』大雅抑篇について直接に調査鑑賞する機会を二度得た。本稿は、この調査内容を概略し、検討を加えたものである。

調査鑑賞にあたり、特別の御高配を頂きました筑波大学教授角井博先生また東京国立博物館学芸部東洋課中国美術室長富田淳氏に對しまして深謝申し上げます。

1. 作品の概要

本件は、朱絲界を施した紙面に墨書されて冊頁に仕立てられている。一開あたり四字詰八行で、全一六開である。一開の縦長29.5 cm、横長44.0 cmで、二開から一六開は縦長29.5 cm、横長43.5 cmである。

狭板には「鄧完白先生隸書冊頁真蹟 頤石齋主珍藏」①の題簽がある。本文一六開の前に二開また後に二開の冷金箋があるが、題跋蔵書印等はない。総計二〇開により構成されている。

本文一開と二開から一六開までとに紙面の寸法の違いがあるが、細密に点検すると一開右辺5mmには刀跡があり引首印にあたっている、そこで本文一開右辺のみ5mmを残したことが理由と思われる。これは本件が原装ではなく、改装をへていることを示している。また始頁一開と終頁一六開紙面に僅かながら汚損が見られ、本文前二開また後二開の冷金箋には汚損がないことから裏付けられる。これから原装の紙面を復原すると縦長30.5 cm、横長44.5 cmであったことが考えられる。

内容は、『詩経』にある大雅抑篇一二章の全文を隸書によって書いたものである。作品款文には嘉慶二年（丁巳 1797）の十月既望（10月16日）に書かれたことが記され、鄧石如五五歳の書である。

作品の来歴は、押印された鑑蔵印から清朝末期の収蔵家である呉雲②を経て、高島菊次郎氏③の所蔵となり、高島氏より東京国立博物館に寄贈された④。

① 頤石齋、姓名伝記とも不詳。

② 号、平齋。1811-1883 金石書画の収蔵家として著名。

③ 号、槐安。1875-1969 福岡県北九州市門司の出身、王子製紙株式会社社長。

④ 昭和四〇年（1965）の寄贈。寄贈の内容は『高島菊次郎氏寄贈中国美術展目録』（東京国立博物館 1965）で、作品図版は『槐安居樂事』（求龍堂 1964）でみることができる。

『槐安居樂事』は、高島菊次郎氏が蒐集した中国美術品のカタログで、九〇歳を祝頌して作られた。これが高島氏自身の高志により一括して東京国立博物館に寄贈された。

寄贈品の内、鄧書は四件。四体帖（嘉慶二年七月 1797）・楷書冊『長慶集』・行書七言絶句立幅、および本件（嘉慶二年一〇月 1797）である。

なお『槐安居樂事』『高島菊次郎氏寄贈中国美術展目録』ともに四体帖を目録に挙げて、隸書冊頁『詩経』大雅抑篇を挙げないが、図版に四体帖として載せられた作品写真は隸書冊頁『詩経』大雅抑篇の終頁である。これは四体帖と隸書冊頁『詩経』大雅抑篇がおなじ匣に収められ、この匣題が「四体帖」とあるためである。

2. 鄧書『詩経』大雅抑篇の本文

鄧石如の隸書冊頁『詩経』大雅抑篇は、『書苑』第五卷二号（三省堂 1941）に写真図版三二頁が、また『書道藝術』第一〇卷（中央公論社 1976）に写真図版六開が紹介されている。『書苑』三二頁の内容は、原件一六開の見開きを左頁と右頁に分割し製版印刷されたものである。『書道藝術』六開の内容は、冊頁冒頭の第一開から第三開まで、末尾の第一四開から第一六開までである。

今回、一六開全部について内容を調査し、鄧書『詩経』大雅抑篇の本文について本文対校を行なった。なお対校にあたり、『詩集伝』（香港中華書局 1961）を使用した。

・記号（ ）は、『詩集伝』にあつて、鄧書にない文字。

・記号★は、鄧書にある文字で、『詩集伝』とは異なるもの。

・記号＊は、『詩集伝』にある文字。

・記号◎は、別体字また異体字であるが、『詩集伝』と同じ内容を持つ文字。

第一開

「抑抑威儀／維德之隅／人亦有言／靡◎喆「＊哲」不愚／庶人之愚／亦職維疾／◎喆「＊哲」人之愚／亦維斯戾」

第二開

「無競維人／四方其訓／之有覺德／行四國順／之訏謨定／命遠猶辰／告敬慎威／儀維民之」

第三開

「則其在于／今興迷亂／于政顛覆／厥德荒湛／于酒女雖／湛樂從弗／念厥紹罔／敷求先王」

第四開

「克共明刑／肆皇天弗／尚如彼泉／◎汩「＊流」無論胥／以亡夙興／夜寐◎灑「＊洒」掃／★庭「＊廷」內維民／之章脩爾」

第五開

「車馬弓矢／戎兵用戒／戎作用邊／蠻方質爾／人民謹爾／侯度（用戒不虞）慎爾／出話敬爾／威儀無不」

第六開

「柔嘉白圭／之玷尚可／磨也斯言／之玷不可／磨也無易／由言無曰／苟矣莫捫／朕舌言不」

第七開

「可逝矣無／言不讎無／德不報惠／于朋友庶／民小子子／孫繩繩萬／民靡不承／視爾友君」

第八開

「子輯柔爾／顏不遐有／愆相在爾／室尚不◎愧「＊媿」／于屋漏無／曰不顯莫／予云觀神／之格思不」

第九開

「可度思矧／可★弋「＊射」思辟／爾爲德俾／臧俾嘉淑／慎爾止不／愆于儀不／僭不賊鮮／不爲則投」

第一〇開

「我以桃報／之以李彼／童而角實／虹小子荏／染柔木言／繒之絲溫／溫恭人維／德之基其」

第一一開

「維◎喆「＊哲」人告／之話言順／德之行其／維愚人覆／謂我僭民／各有心於／◎戲「＊乎」小子未／知臧否匪」

第一二開

「手攜之言／示之事匪／面命之言／提其耳僭／曰未知亦／既抱★之「＊子」民／之靡盈誰／夙知而莫」

第一三開

「成昊天孔／昭我生靡／樂視爾夢／夢我心慘／慘誨爾諄／諄聽我藐／藐匪用爲／教覆用爲」

第一四開

「虐借曰未／知亦聿既／耄於◎戲「＊乎」小／子告爾舊／止聽用我／謀庶無大／悔天方艱／難曰喪厥」

第一五開

「國取譬不／遠昊天不／忒回適其／德俾民大／棘抑十二／章三章章／八句九章／章十句」

第一六開

「嘉慶二年／歲在丁巳／十月既望／書於醉墨／軒中／完白山人／鄧石如／」

第五開のなかに四文字を「用戒不虞」を脱落していることを確認した。

また第四開・第九開・第一二開にそれぞれ一字、計三字に異同がある。

3. 隸書『詩經』大雅抑篇に書かれた文字

作品①には、異体字が多用されている。この例は以下の通り。

- ・第一開には、A「儀」、B「徳」、C「喆」、D「庶」、E「職」。
- ・第三開には、F「今」、G「亂」、H「顛」、I「荒」。
- ・第一四開には、J「戯」、K「聽」。
- ・第一六開には、L「歳」。

①平成二十一年八月二十七日、東京国立博物館資料館において本件の写真資料を検索したが、第二開から第一五開については未収録であった。このため資料図版により第一開から第三開、第一四開から第一六開までの文字について検討した。

それぞれの異体字の出典は、

- A「儀」、『隸弁』に字例がある。
- B「徳」、『隸弁』に字例がある。
- C「喆」、『隸弁』に字例がある。
- D「庶」、『隸弁』に字例がある。
- E「職」、出典不明。
- F「今」、『隸弁』に字例がある。
- G「亂」、出典不明。
- H「顛」、出典不明。
- I「荒」、出典不明。

J「戯」、『隸法彙纂』に字例がある。

K「聽」、出典不明。

L「歳」、『隸弁』に字例がある。

包世臣『芸舟双輯』に収められる「完白山人伝」には、鄧の隸書字習の様子を述べている①。

……『史晨前後碑』『西嶽華山廟碑』『白石神君碑』『張遷碑』『潘校官碑』『孔羨碑』『受禪碑』『大饗碑』について、それぞれを五十本臨書して三年にして分書(隸書)が完成した。……書かれた分書が適麗にして淳質であり変化は万物することができない。結体は極めて嚴整であり、渾融無迹のさまである。(わたくし)包が思うことには『嶧山碑』『禪国山碑』の法を取りられている。だから山人(鄧)が自ら謂うことには「私の篆書は李陽冰②には及ばないが、分書なら梁鵠③には劣らない。……という。このように鄧みずから隸書にたいして自信の程を述べているが、作品の揮毫にあたつては『隸弁』や『隸法彙纂』など、当時の通行の実用書とも言うべき隸書字典を援用していることがわかり、包の伝記内容と、鄧の実際の書作の内容とは齟齬がある。

鄧の当時にあつて、隸書の実用書は、『漢隸字源』④の系統(『隸弁』⑤『隸法彙纂』⑥)と『隸韻』⑦の系統がある。鄧も諸本のいづれかによつたものであろうことは、想像するに難くない。むしろ包世臣の「完白山人伝」を全面否定するものではないが、布衣であつた鄧石如を余りにも権威づけしようとする誇張の意図が伺える。

また、出典不明の文字があるが、これは今後の課題として検討の必

要がある。

①乃学漢分、臨『史晨前後碑』、『華山碑』、『白石神君』、『張遷』、『潘校官』、『孔羨』、『受禪』、『大饗』各五十本。三年分書成。……其分書適麗淳質、變化不可方物。結體極嚴整、而渾融無迹。蓋約

『嶧山碑』、『国山』之法而為之。故山人自謂、吾篆未及陽冰、而分不減梁鵠。

②生卒不詳、唐中葉の頃の人。篆書の名人として、秦の李斯以後第一人者と言われた。

③生卒不詳、晋末魏初の頃の人。後漢の能書家の師宜官の法を学び、八分の名手とされる。

④婁機（1133～1211）が、『漢隸字源』六巻を著わした。

⑤顧藹吉が『漢隸字源』を増訂し、『隸弁』八巻を著わした。康熙五七年（1718）項綏が、玉煙堂本『隸弁』を刊行した。

⑥項懷述が、『隸弁』を『康熙字典』の部目により「画引」配列として『隸法彙纂』十巻を著わした。

⑦淳熙二年（1175）劉球が、『隸韻』十巻を著わした。嘉定五年（1212）宋鈞が、『隸韻』を重修した。明末に毛晋が、『隸韻』を重写重刻した。

4. 隸書『詩經』大雅抑篇に押された款印

第一開に「家在龍山鳳水」印、第一六開に「石如」印、「鄧氏石如」印がある。

・「家在龍山鳳水」印は、鄧石如四九歳から五九歳のあいだの作品に押印されている①。

・「石如」印は、四九歳から五五歳のあいだの作品に押印されている②。

・「鄧氏石如」印は、五五歳から五八歳のあいだの作品に押印されている③。

①「家在龍山鳳水」印（朱文）は、鄧自用印三三件（稿者の調査による）のなかで、もっとも使用期間が長く、一年間にわたり用いられた鄧愛用のものである。使用時期として50歳

（1例）・51歳（1例）・52歳（1例）・53歳（1例）・55歳（3例）・56歳（1例）・

57歳（1例）・58歳（2例）・59歳（1例）に押印例がある。

50歳（1792）立幅 隸書「磯邊鶴去辭……」

51歳（1793）立幅 草書「到來忽評有……」

52歳（1794）対幅 隸書「萬華盛處松……」

53歳（1795）立幅 草書「江樓玉簫暗……」

55歳（1797）冊頁 四体書（隸書）「少學琴書偶……」

55歳（1797）立幅 行草書「清風江閣早……」

55歳（1797）冊頁 楷書「抑々威儀維……」（本件）

56歳（1798）立幅 草書「百尺偕攀崧……」

57歳（1799）冊頁 四体書（楷書）「司馬溫公……」

58歳（1800）立幅 篆書「龍虎之山靈……」

58歳（1800）八屏 草書「登東嶽」「岱秩巍巍乘……」

59歳（1801）四屏 四体書（隸書）「僕長安道陵……」

②「石如」印（朱文）は、使用時期として49歳（2例）・50歳（1例）・51歳（1例）・

52歳（1例）・53歳（1例）・55歳（3例）に押印例がある。

49歳（1791）篆書「程子四箴」「程子四箴規……」

49歳（1791）四屏 篆書「南陔孝子相……」

- ・50歳(1792) 立幅 隸書「磯邊鵠去辭……………」
- ・51歳(1793) 立幅 草書「到來忽評有……………」
- ・52歳(1794) 対幅 隸書「萬華盛處松……………」
- ・53歳(1795) 立幅 草書「江樓玉簫暗……………」
- ・55歳(1797) 冊頁 四体書 (草書)「擇故山濱水……………」
- ・55歳(1797) 立幅 行草書「清風江閣早……………」
- ・55歳(1797) 冊頁 楷書「抑々威儀維……………」(本件)
- ③「鄧氏完白」印(白文)は、使用時期として55歳(4例)・56歳(1例)・57歳(4例)・58歳(4例)に押印例がある。

- ・55歳(1797) 冊頁 四体書 (楷書)「雪齋清境發……………」
- ・55歳(1797) 冊頁 四体書 (草書)「擇故山濱水……………」
- ・55歳(1797) 立幅 行草書「清風江閣早……………」
- ・55歳(1797) 冊頁 楷書「抑々威儀維……………」(本件)
- ・56歳(1798) 立幅 草書「百尺偕攀谿……………」
- ・57歳(1799) 立幅 篆書「徽國朱文公四齋銘」 「奠我德性希……………」
- ・57歳(1799) 冊頁 四体書 (隸書)「焚香看書人……………」
- ・57歳(1799) 冊頁 四体書 (楷書)「司馬溫公云……………」
- ・57歳(1799) 冊頁 四体書 (行草書)「躊躇畦苑遊……………」
- ・58歳(1800) 立幅 篆書「龍虎之山靈……………」
- ・58歳(1800) 横披 篆書「敬止堂」
- ・58歳(1800) 五屏 篆書「徽國朱文公四齋銘」 「奠我德性希……………」
- ・58歳(1800) 八屏 草書「登東嶽」 「岱秩巍巍秉……………」

5. 鄧の伝記資料と略伝

鄧の伝記資料には、『清史稿』卷五〇三・『国朝先正事略』卷四四・『国朝書画家筆録』卷二・『国朝書人輯畧』卷六などの資料がある①。

鄧は清の乾隆八年(1743)四月二十九日、懷寧県(安徽省)集賢関外大龍山西北白麟坂に生れた②。

祖代に鄱陽県(江西省)より懷寧県にうつり、鄧君瑞より三世が石如にあたる。父は一枝(号木斎)、祖父は澹園という。

はじめ名は琰、字を石如といった。のちに仁宗嘉慶帝の即位に際し、五四歳以後その諱(顥琰)を敬避して名を石如、字を頑伯に改めた。別号として古浣・古浣子・長卿・笈遊道人・鐵硯山房・完白山人・完白山民・完白翁を書法款識に見ることができる。また刻印款識には、ほかに赤玉・頑道人がある。

①いづれの資料も鄧と同時期に活躍した、孫雲桂『完白山人伝』・呉育『鄧石如伝』・包世臣『完白山人伝』・方履篋『鄧完白先生墓碑』・李兆洛『石如鄧君墓志銘』・楊沂孫『完白山民伝』にもとづいたものである。

②鄧光祖『鄧石如伝略』(光緒二〇年重修『白麟鄧氏宗譜』所収 1904)に拠る。

6. 鄧の生涯の実像

資料により一致しない部分や事実と異なる処もあるが、最も詳しい

内容を持つ包世臣「完白山人伝」の概略は次ぎの通り。

・弱冠に両親を亡くし①、生活のために諸国に売印をした。
・七八年して寿州にて梁巖に認められる。梁の紹介によって梅鏐の援助を受けた②。

・八年滞在したうち、はじめ五年篆書を学び、のち三年隸書を学んだ。梅家の傾業とともに、梅家を離れ売書売印を業とした③。

・歙県にて書を張惠言(1761-1802)に認められ④、張の紹介により金榜(1735-1801)の援助を受けた。一年滞在中金家の諸書を揮毫した。この間、金の推薦によって曹文植(生卒不詳)のために書作した。

・四六歳妻を娶る。数年のち亡くなって後妻を娶る⑤。

・乾隆五五年(1790 四八歳)曹の招きによりて北京にゆき劉墉(1719-1804)また陸錫熊(1734-1792)に賞賛される。のち劉は失脚し、また陸が急逝した。さらに翁方綱(1733-1818)から批判されたことから北京を離れた。

・のちに畢沅(1730-1797)の招きに応じた⑥。三年間滞在中のち帰郷にあたり住居宅地を贈られた。

・嘉慶七年(1803 六〇歳)包世臣と出会う。

・嘉慶一〇年(1805 六三歳)一〇月四日、自宅で亡くなった。

①父一枝が亡くなったのは乾隆五二年(1787 四五歳)の時。

②刻印作品から三八歳頃と考えられる。

③三八歳-四六歳頃。

④金榜との交際は乾隆四七年(1782 四〇歳)の時。

⑤潘氏との結婚は乾隆二五年(1760 一八歳)の時。沈氏との再婚は乾隆四九年(1787 四二歳)の時。

⑥書法作品から五〇歳頃と考えられる。

包「完白山人伝」については、年代に正確を欠く所があるが内容についてはおおむね妥当である。こうして鄧の生涯を綜覧すると、鄧自身による事実よりも鄧と係わった人物による記録である。こうしたことは、鄧が科擧に應じなかったことにより官職の記録が皆無であること。また文芸面での活躍とくに詩文での著作がなかったことが理由と思われる。鄧と同時期に活躍した政治家や文人、また名士との逸話を連ねることで鄧の伝記は構成される。これによって生涯を一布衣に過ぎた鄧の在野での活躍は、処世に縛られることのない精神の自由を強調するものである。

7. 包世臣における鄧石如の評価

包世臣①は『芸舟双楫』の「論書」なかで、書の理想とすべき表現を気満としている。この理想を実現するために逆入平出という実践手段を提唱する。さらに「国朝書品」において過去の作家に優劣を加えた。

九段階による作家の評価は、最高を神品とし、ついで妙品・能品・逸品・佳品のそれぞれを上下とした。神品に鄧の隸書(古隸)と真書(楷書)を挙げ、つぎの妙品上は、鄧の八分と篆書を挙げた。行書・

草書をのぞいて鄧の楷書・篆書・隸書・八分が最高のものであることを主張した。のちに包は、鄧の草書を妙品上加えている。

包の鄧にたいする尊嵩は、そのまま「完白山人伝」にも反映されて事実を誇張して表現している部分があることは十分考慮されるべきことである。

①号、倦翁。1775-1855 包の書論は、北碑の尊重を提唱して、阮元の書論とともに

清朝後半期における北碑派流行の素地となった。

8. 鄧の文芸と評価

鄧の文芸は、刻印と書法に限定される。文人の三絶とも四絶とも言われる詩書画篆刻のうち、画については管見にして未見である。詩文については専集としての上梓は見当たらない①。こうしたことは、それだけに刻印書法に生涯を凝縮したと言うべきであろう。

鄧において刻印書法は平行して実践されたと考えられるが、先行して完成したのは刻印である。制作年のある作品を点検②しても、刻印が三〇代半ばに集中して見られる。また生涯を通して刻印は行なわれ二〇〇顆余りが確認できる。刻印は鄧の生涯を通しての生業であったようである。

書法は、篆書隸書が鄧の最も評価されるところで、とくに篆書書法は今日にいたるも最高境地とされる。篆書は当時、玉箸篆が完成されていたが、筆鋒を焼いて揮毫するなど工芸的要素が強かった。これを

後に逆入平出と呼ばれる筆法によって篆書書法を完成させたのが鄧である。

鄧以後、篆書書法を継承した呉熙載・趙之謙・吳昌碩等がいるが、清朝後期を代表する書法家であると同時に、著名な篆刻家でもある。この事実は鄧によって始めて書法と刻印が一致したことを示すものである。鄧によって確立された篆書書法と刻印の一致による近代篆刻の創始は、鄧最大の功績である③。

①西川寧先生は『完白山人詩文』（1961）を編まれたが、内容は詩存として五言律詩七篇、五言絶句二篇、七言律詩一二篇、七言絶詩三篇を挙げ、また文存としては題跋一一則のほか二条を挙げるにとどまる。

また穆孝天・許佳琮『鄧石如研究資料』（1988）には、詩存七一篇、詞存五篇、文存八篇、書札六件を載せる。両著とも刻印・書幅・尺牘より採録したものである。

②資料I鄧石如作品の形態による分類、参照。

③篆刻は、文彭・何震に代表される徽派、丁敬に代表される浙派に多くの印人を排出した。これらの印人の書法作品は、隸書に各人の独自性を表現するものの篆書を書作の中心にするものはなかった。

また白文は漢印に依り、朱文は玉箸篆に依ると言う徽派・浙派のうちに形骸化された印風を書法刻印一致によって一変させた鄧の印風は、皖派また鄧派と言われる。

9. 鄧書における隸書

鄧の生涯を傾注凝縮した刻印書作品は、稿者の調査によれば三二九

件が確認できる。このうち刻印は二〇八件で六割ほど(63.2%)を占める。隸書四四件(13.4%)・篆書(古文を含む)三八件(11.6%)・行書(行草書を含む)二八件(8.5%)・楷書一件(3.3%)である。詳しくは資料I鄧石如作品の形態による分類を参照願いたい。

生涯を通しての売芸の中心であった刻印は、無紀年作品が一八五件で、多くが制作年の判明しないものである。これは鄧に限られたことではなく、作品依頼が多くなればなるほど款識が書かれることは少なくなるのが通例である。款識は、作者の署名が最小内容で、これに制作年時、依頼者、制作の事情・状況などが付加される。款識を読むことによって、作品の由来因縁を知ることができる重要内容である。ところが作品依頼が集中する人気作家になると、この款識が短文になり、場合によっては制作者の署名のみというののまま見受けられることがある。鄧とほぼ同時代の伊秉綬①また陳鴻寿②などは作品依頼が集中する人気作家で数多く作品を確認することができるが、署名があるのみで款識によって制作年を知りえない作品が多くを占める。

刻印を除いて鄧書を検討すると隸書がもっとも多い、ついで篆書(古文を含む)・行書(行草書を含む)・楷書の順である。鄧書において、隸書はもっとも得意とするところであり、篆書と共に一番の表芸といつて良いものである。

鄧の隸書作品は、四四件が確認できる。このうち有紀年作品(制作年の書かれているもの)二六件の内容は、四〇歳代三件、五〇歳代一件、六〇歳代(亡くなる六三歳までの四年間のみ)一二件がある。無紀年作品(制作年の書かれていないもの)は一八件がある。この無

紀年作品が多いのも隸書作品の顕著な傾向で、隸書作品の四四件中の四割ほど(40.9%)にあたる。これは作品依頼が集中したことを裏付けるものであり、当時においての世評も隸書に集まったと考えられる。前述の包世臣が述べた神品としての古隸と楷書、妙品上としての八分と篆書という評価は、作例からも証明されるものである。

なお楷書については作例がもっとも少なく、当時の世評と後世の評価が一致しないものである。鄧の楷書については、趙之謙③が「正書は、…唐以後の一点の習気無し。故に貴ぶべし。」…楷書は唐以後の悪態がない、だから優れているのだ。…という跋文④を残して、改めて楷書に評価を与えていることは注意される。

①号、墨卿。1754-1815 良官として民衆から敬慕を集めた。中鋒による独特な書を書いた。

②号、曼生。1768-1822 清貧を守り、文人として趣味人であった。自製砂壺は、曼生壺と称される。

③号、悲盦。1829-1884 北碑を学んで独自のものがあり、北魏書と呼ばれた。

④制作年が49歳から53歳に推定される冊頁(七開)楷書「陶弘景答謝中書書」の趙之謙跋文。

10. 鄧書における『詩経』大雅抑篇

鄧書の文章内容は、自作詩や聯語を除いて文章内容を検討すると、經学(儒学)に関するもの①、文学に関するもの②、逸文に関するもの

の③、逸士の伝記に関するもの④、鑑戒に関するもの⑤、仏教に関するもの⑥を挙げることができる。

経学に関するものは、『易経』『詩経』に限られるようである。

文学に関するものは、蘇軾・欧陽脩・司馬光など宋人の文学について親しんでいる。

逸文に関するものは、埋もれた文章を積極的に残そうとする行為であり、鄧の学問への姿勢が伺える。

逸士の伝記に関するものは、鄧自身が官途には就かず生涯布衣であったことから、市井の人々に関心が向けられたことと思われる。鄧自身の何者にも拘束されない精神の開放と孤独からの共鳴が感じられる。鑑戒に関するものは宋学の張載・程頤・朱熹について多くあり、文学での関心した内容と一致している。篆書隸書という荘重な書体を得意とした鄧書にふさわしい内容と考えられる。

四書五経⑦は文人の必須の教養科目であるが、鄧の書作においては『易経』と『詩経』に限られているようである。とくに『易経』については一再ならず取り上げており、関心の高さを示している。

これに次ぐものが『詩経』で、本件にさがけて四九歳(1791)四屏篆書『詩経』南陔篇がある。この南陔篇は、『詩経』に篇名があるのみで本文が伝わらない逸文で、後人が補った文章は『文選』『古詩源』に載せられる。鄧書において、こうした逸文に類する文章を書く傾向は四六歳(1788)六屏篆書『梅国記』、四九歳(1791)四屏篆書『詩経』南陔篇、五八歳から五九歳に推定される立幅隸書『経鉏堂』

雑誌』、六二歳(1804)篆書『管子』弟子職などにみられる。

『詩経』には三〇五篇を収める。三〇五篇は、国風一六〇篇・小雅八〇篇(うち六篇は篇名のみ)・大雅(三二篇)・頌四〇篇がある。内容は、国風が各国の民謡、小雅・大雅が宮廷の音楽、頌が宗廟祭祀の楽歌である。この中でも大雅は、周の祖先から文王・武王にいたる歴代を頌徳し、子孫を鑑戒し、天子を祝福する内容を持つ宮廷の音楽歌謡である。

大雅三一篇は、文王之什一〇篇・生民之什一〇篇・蕩之什一一篇から構成される。本件の抑篇は、蕩之什一一篇に含まれるもので、衛の武公がみずから自警した詩とされる。目加田誠氏は、抑篇について：周室の老父が年若い王を誠しめた歌で、衛の武公もそれを人に歌わせて、自分のいましめとしたものと見るべきであろう。(『新釈 詩経』目加田誠 1954 岩波書店)……と指摘されている。鄧書の文章内容については、始めに指摘した通り内容に共通した傾向が見られるが、本件の『詩経』大雅抑篇についても鑑戒の内容を持ち、鄧の好んだ文章の一つと考えられるものである。

① 経学に関する作品

- ・三九歳(1781) 立幅篆書 臨李陽冰『周易』謙卦がある。
- ・三九歳(1781) 立幅篆書『周易』説卦がある。
- ・五五歳(1797) 隸書冊頁『詩経』大雅抑篇がある。(本件)
- ・六三歳(1805) 六屏隸書『周易』謙卦がある。

② 文学に関する作品

・四一歳(1783) 刻印『江流有聲斷岸千尺』は蘇軾の語である。

・四一歳(1783) 刻印『新篁補舊竹』は歐陽脩にちなむ語である。

・四四歳(1786) 冊頁隸書『司馬溫公居家雜儀』残冊は司馬光の文章を書いたものである。

・四六歳(1788) 立幅隸書『歐陽永叔入……』は歐陽脩に關しての文章である。

・四六歳(1788) 刻印『我書意造本無法』は蘇軾の語である。

③逸文に關する作品

・四六歳(1788) に推定される六屏篆書『梅国記』は、出典の不明なものである。中田勇次郎先生は、六朝の神怪小説と指摘されている。(『梅国記』作品解説『書道藝術』第一

○卷 中央公論社 1976)

・四九歳(1791) 四屏篆書『詩經』南陔篇は、『詩經』に篇名のみが伝わるもので逸文である。これを後人が補つて『文選』『古詩源』に載せられる。

・五八歳から五九歳に推定される立幅隸書『經鉅堂雜志』は、出典の不明なものである。

・六一歳(1804) 篆書『管子』弟子職がある。管仲の作と言われるが、後代の仮託や増補が多いとされる。

④逸士の伝記に關する作品

・四八歳(1790) 四屏四体書があるが周總・劉慧斐・周統之・祁嘉の小伝であり、四人の逸士の伝記を書いている。

・五五歳から五八歳に推定される卷子行草書『水滸伝』序がある。『水滸伝』は、郡盜を題材にした通俗小説である。

⑤鑑戒に關する作品

・四九歳(1791) 四屏篆書『程子四箴』は、宋学の碩儒で程頤(1033~1107)の文章を書いたものである。

・四九歳から五三歳に推定される四屏隸書『山静胡先生四箴』は、胡山静の四箴を書いたものである。胡山静については不詳。

・五七歳(1799) 立幅篆書『朱文公四齋銘』は、朱熹(1130~1200)の四齋銘を書いたものである。

・五八歳(1800) 五屏(六屏)篆書『朱文公四齋銘』は、宋学の碩儒で朱熹の四齋銘を書いたものである。

・六〇歳(1802) 横幅隸書『崔子玉座右銘』は、『文選』に載せる。

・六二歳(1804) 立幅隸書『淮南子』堯戒がある。『淮南子』『古詩源』に載せる。

・六三歳(1805) 六屏篆書『程伊川非礼物言箴』がある。程頤の文章を書いたものである。

・六三歳(1805) 八屏隸書『張氏東銘』がある。宋学の先駆者である張載(1020~1077)の『東銘』を書いたものである。

⑥仏教に關する作品

・六一歳(1803) 篆書『般若波羅密多心經』がある。

⑦四書、『大学』『中庸』『論語』『孟子』。五經、『易經』『書經』『詩經』『礼記』『春秋』。

11. 結語

本稿は、鄧石如 隸書『詩經』大雅抑篇を対象とし、鄧の書作の内容(異体字の使用)・鄧の書作における隸書とその評価・鄧の文芸と書作内容について検討を加えた。

鄧の書作の内容(異体字の使用)については、原件写真を得なかったために第四開から第一三開までについて紹介しえなかったことは残

念である。

鄧の書作における隸書とその評価は、鄧の隸書の変遷を書例を示して具体的に指摘したかったが、内容が豊富なため本稿に含めなかった。別に稿を草したい。

鄧の文芸と書作内容については、鄧自身の著作がないために経学・文学とも明確にしない。これらを補うために書作の内容から、その学問を推察することになる。古典テキストまた自作文書・自詠詩から書作が行なわれるが、古典テキストについては典拠を知り得るものが多いことから検討を試みた。また、自作文書・自詠詩については複数の古典を背景として表現されることから考察には十分な検討が必要であり本稿では触れていない。これは今後の課題としたい。

〈参考文献〉

— 中文 —

『隸弁』 顧竊吉

『玉煙堂本 隸弁』 (1718) 項綢

『隸法彙纂』 項懷述

『芸舟双輯』 (1830) 包世臣

『詩集伝』 (1961) 香港中華書局

『鄧石如法書選集』 (1963) 鄧以蜚

『鄧石如研究資料』 (1988) 穆孝天・許佳琮 人民美術出版社

— 日文 —

『新釈 詩経』 (1954) 目加田誠 岩波書店

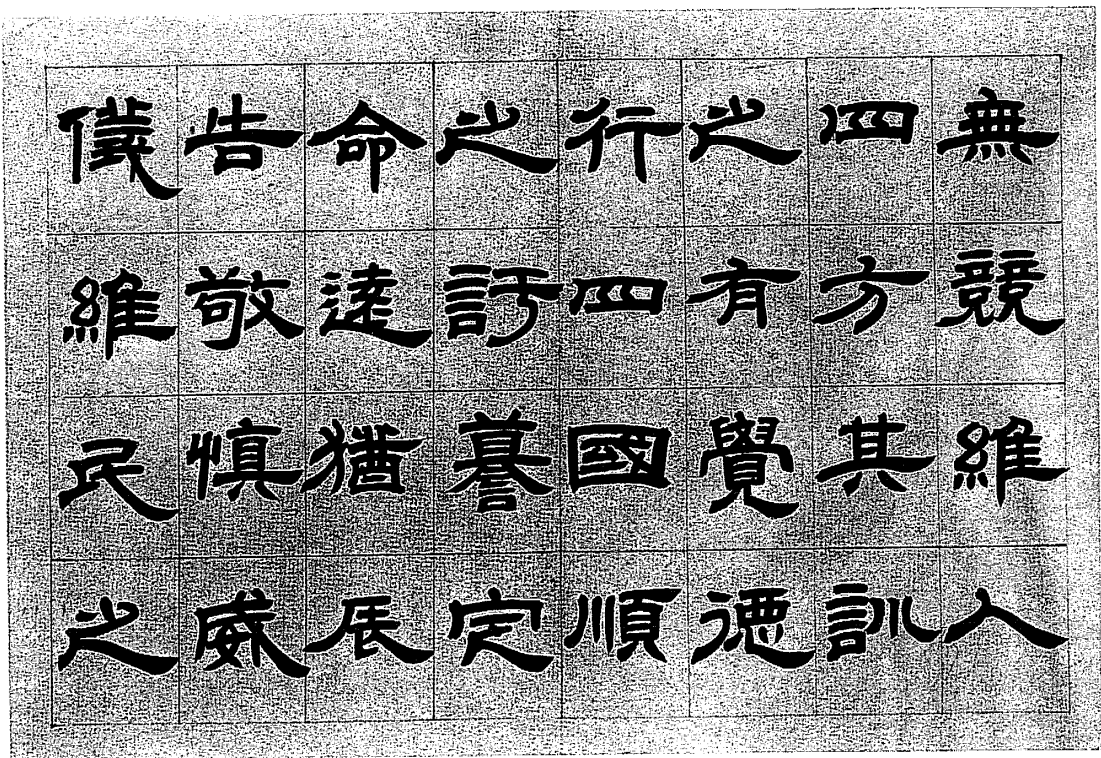
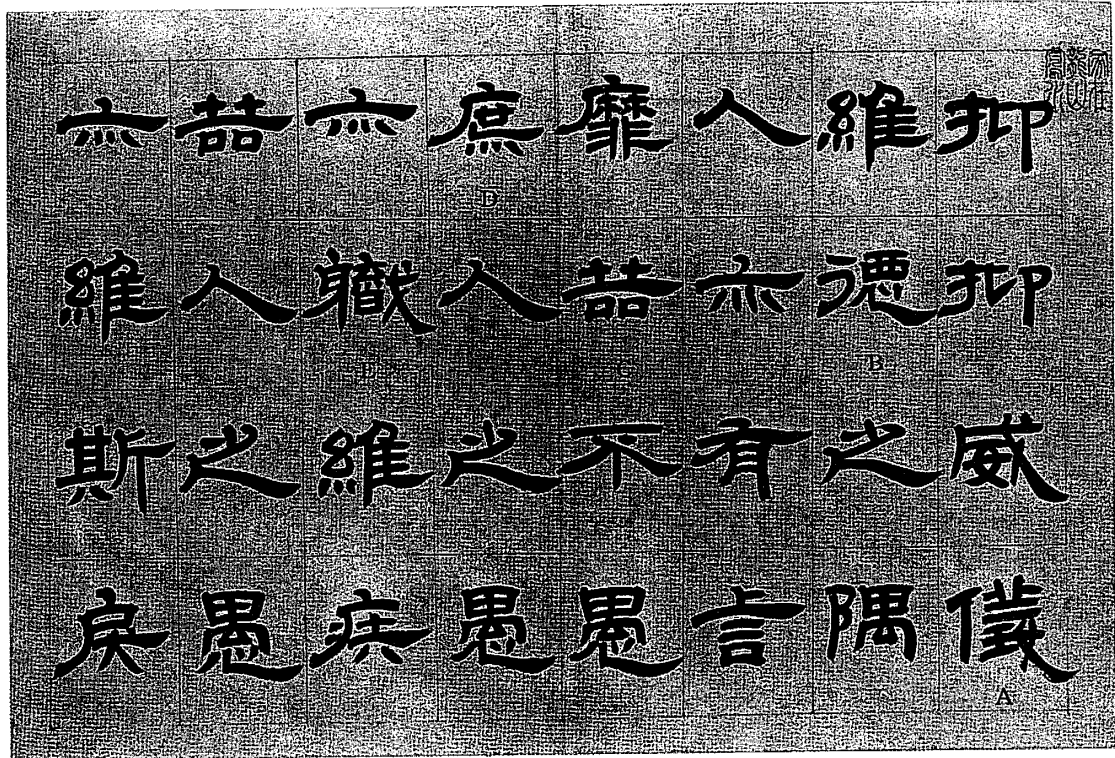
『完白山人詩文』 (1961) 西川寧 (『西川寧著作集』 9 1992 二玄社 所載)

『槐安居樂事』 (1964) 求龍堂

『高島菊次郎氏寄贈中国美術展目録』 (1965) 東京国立博物館

『書道藝術』 第一〇卷 (1976) 中央公論社

『鄧石如(有紀年)作品目録』 (1998) 遠藤昌弘 (『大東 書道研究』 7 大東文化大学書道研究所 所載)



(第三開)

數	念	湛	于	厥	于	今	則
求	厥	樂	酒	德	岐	興	其
先	紹	從	女	棗	奠	迷	在
王	周	弗	維	湛	覆	亂	于

(第一四開)

難	悔	謀	止	子	耄	知	實
曰	天	庶	聽	告	於	亦	借
喪	方	無	用	爾	歎	聿	曰
厥	艱	大	我	舊	小	既	未

章	八	章	棘	灑	忒	達	國
十	句	三	抑	俾	回	昊	取
句	九	章	十	民	遙	天	譬
	章	章	二	大	其	不	不

	鄧	完	軒	書	十	盛	嘉
	石	白	中	於	月	至	慶
	如	山		醉	既	丁	二
		人		墨	望	己	年

石如山人

嘉慶二十六年

資料 I 鄧石如作品の形態による分類

年号	乾隆										嘉慶																	
	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10
西曆	1778	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	1800	01	02	03	04	05
年齢	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
歳																												
刻印	2	—	5	2	—	4	—	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2	—	
篆書	—	—	—	2	—	—	—	—	1	—	—	2	2	—	—	—	—	1	1	1	2	3	1	—	1	3	2	
隸書	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	1	—	1	1	1	—	2	—	1	—	4	4	1	3	4	
草書	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	1	1	—	—	2	—	
行書	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1	—	
行草書	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—	1	—	—	1	—	—	—	
楷書	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	1	—	1	—	—	1	
古文	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
年齢	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
小計	2	—	5	4	—	4	—	—	2	—	8	1	5	2	1	2	1	2	2	8	2	5	4	7	6	3	12	6
合計	94件 (制作年不明235件)																											

総計 329件

・刻印は、両面印については印面ごとに数え2面とした。書法は、立幅・対幅・四屏六屏など・横披・冊頁にかかわらず1件とした。